

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

エジソン から学んだ日本の電気事業  
—名古屋電灯丹羽正道も教えを受ける—

エジソン(Thomas Alva Edison)は生涯に1,300もの発明と技術革新を行った人物である。その中でも

- ① 音を記録し再生する蓄音機(フォノグラフ)の発明
- ② 京都の竹などフィラメントを用いた白熱電球の発明
- ③ 動画撮影機キネトグラフの発明

これらはエジソンの三大発明と言われる。

また、エジソンは「発明王」の他、研究所がメロンパークに置かれたために「メロンパークの魔術師」、初の西部映画「大列車強盗」を制作したことなどに因んで「アメリカ映画の父」、さらに自らの発明した権利を守るため訴訟を厭わなかったことから「訴訟王」などの様々な異名を持っている。

このほかエジソンの大きな功績は発電から送電まで電気の事業化に成功したこと、電球を始めとする電化製品を製造する現在のGE社(ゼネラル・エレクトリック・カンパニー)などを設立した起業家であったことである。

1882(明治15)年、ニューヨークの中心街パール・ストリートにエジソン中央発電所(出力：540kW、直流発電機：6基)を建設し、本格的な電気の時代をむかえた。現在、アメリカ電力会社の社名でコンソリデータード・エジソン(ニューヨーク)、サザンカリフォルニア・エジソン(ロサンゼルス)、コモウエルズ・エジソン(シカゴ)、ボストン・エジソン(ボストン)などアメリカ国内にエジソンの名前を冠している電力会社が多くある。

アメリカの電気事業者は、私営電気事業者189社(=民間電気事業者)、連邦電気事業者9社、地方公営電気事業者2,013社、協同組合電気事業者その他1,095社の4つに大別され、約3,300社ある。そのうち1933(昭和8)年に設立された私営電気事業者の全国組織としてエジソン電気協会(EEI=Edison Electric Institute)には約100社が加盟している。

ところで、日本は明治維新後、新政府が「富国強兵」「殖産興業」を国是に西洋列強と対等になることを目指し、日本の産業革命を興し、文明開化を進めたのは陸蒸気と言われた鉄道と電気の明かりに始まった電気事業であった。

日本の電気事業は1887(明治20)年に東京電灯が開業し、引続き1889(明治22)年に大阪電灯、名古屋電灯が設立され、その後、全国各地に広まり明治20年代にわが国の電灯事業の基礎が築かれた。このうち東京電灯の技師長・藤岡市助、大阪電灯の技師長・岩垂邦彦、名古屋電灯の技師長・丹羽正道はエジソンに会い、エジソンのアドバイスを受け発電所を建設していった。これらのことからエジソンは日本の電気事業に大きく貢献したと言える。



トーマス・アルバ・エジソン

1847(弘化4)年~1931(昭和6)年

写真提供:公益法人バンダイコレクション財団

## エジソンの生涯

### 1 エジソンの生い立ち

#### (1) 出生

エジソンは製材所を経営するサミュエル・

オグデンJr・エジソンと宣教師の娘で、小学校教師の経験を持つ母ナンシー・エリオット・エジソンの7番目の子供としオハイオ州マイランで生まれ、7歳の時にミシガン州

ポートヒューストンに移った。幼少期の通称はアルであった。祖先はオランダから移住して、アメリカ・カナダ独立戦争を戦っている。

## (2) 幼少期

少年時代のエジソンは異常なほどの知りたがり屋で、小学校に入学するもわずか3ヶ月で中退させられ、母ナンシーが教えることになった。ナンシーは頭ごなしに押し付けるより、エジソンが何をしたいのか話をよく聞き、地下室を実験室として与えた。エジソンは寝食を忘れ次々と実験を繰り返し疑問に答えを見出そうとした。また、歴史・数学・電気・文学も教え、これらのことが発明王エジソンを誕生させる基となった。同時に、働くことの尊さを学ばせるために仕事の手伝いや野菜売りもさせた。

エジソンが23歳の時にナンシーは彼の偉業を見ることなく急死したが、「人間は人類のために努力して生きなければならない」という母の言葉を心に留め、「僕を理解し、才能を開花させてくれたのは母だけだ」とひどく嘆き悲しんだ。

## 2 発明人生のスタート

12才の時にグランドトランク鉄道列車の新聞売りとなった。新聞売りの時間は列車往復のわずかな時間であったので、空いた時間で実験ができるよう機材を積み込み実験を重ね、また帰りの時間まで図書館に通って勉強し、到着地で八百屋も開いて実験の費用を賄った。

15才の時に自らの手で新聞を編集し車内新聞「グランド・トランク・ヘラルド」を発行した。しかしある人物を皮肉った内容の記事を新聞に掲載したところ、これを見て激怒した男から川に投げ込まれる暴力を受け、これを機に発行を中止した。また、マウント・クレメンズ駅の駅長の息子が轢かれそうになったのを偶然助けたお礼に電信技術を学び、わずかの期間でモールス信号や電信キーをマスター、電信技士としての人生を始めた。16歳からミシガン州、オンタリオ州、オハイオ州、テネシー州などの鉄道駅で通信士として勤務しながら1級通信士の資格を取得、二重通信方式の電信用中継器を試作、開発した。

22才の時に「投票記録機」「株式相場の電信表示機=テッカー」を発明、23才の時にこれの特許を売却し、ニュージャージー州のニューアークにテッカー製造工場と研究所

を設立した。この直後、最愛の母を亡くし悲しみに暮れるエジソンを慰めたのは工場と一緒に働くメアリ・ステイウエルで24歳の時に二人は結婚し、3人の子供に恵まれた。

## 3 メロンパークの魔術師

1876(明治9)年ニューアークの工場を処分しニュージャージー州にあるメロンパークに研究所を設立し、発明集団として人材を集め、後に「集合天才」と呼ばれた。

そして研究に没頭し、次のような発明品を改良試作し商品化していった。

- ① 1877(明治10)年——電話機、蓄音器
- ② 1879(明治12)年——白熱電球
- ③ 1880(明治13)年——直流発電機



白熱電球第一号の複製品：1879(明治12)年、メロンパーク研究所で初めて電球の点灯に成功した電球のレプリカ  
写真提供：公益財団法人バンダイコレクション財団

このうち白熱電球フィラメントの実用化に当たっては、全世界から集められた6,000種類にも及ぶ材料を炭素にして実験を繰り返した。

エジソンがある日、シュロの扇子をフィラメントとして使って見ると200時間以上も灯すことができた。そこで竹の材料を探すために20人の探検隊を派遣した。このうちエジソンの助手ウイリアム・H・ムーアが1880年(明治13)年に来日、竹を探すなら京都の竹がよいと、時の初代榎村正直京都府知事などからのアドバイスを受け、京都石清水八幡宮男山付近の竹を使ってみると約2,450時間という驚異的な数字が出た。そこでエジソンは肥料の使っていない8年から10年もの真竹を10月から12月に収穫し、根から1m以上の12節で外皮を1センチ幅にして100本に束ね納品するように指示した。こうして八

幡宮の竹は1894(明治27)年までエジソン電灯会社に輸出され、全世界に明かりを灯し続けた。そして最初から採算割れした低価格で白熱電球を販売したが、低価格ゆえに大量に普及し、製造コストも下がり、3年後にはすべての研究開発費や製造の赤字分を取り戻し、大きな利益をもたらした。なお、白熱電球発明から50周年を記念して1934(昭和9)年にエジソン記念碑が石清水八幡宮内に建立、100周年を機に1984(昭和59)年に同地に再建された。

#### 4 ウェスト・オレンジ研究所

メロンパークを引き払って一時ニューヨークに住んでいたエジソンは、1887(明治20)年に曾祖父ジョン・エジソンが1730年頃に広大な牧場を経営していた所にメロンパークの10倍規模以上のウェスト・オレンジ研究所を建設した。

またこの近くに1885年に結婚したミナ・ミラーのために「グレモンテ」と呼ばれる邸宅を構えた。

さらに同研究所をもとに多くの事業開発に取り組んでいった。

(1) 映画の発明——蓄音機の研究過程で、音と映像を記録再生できるものと考えたエジソンは、1891(明治24)年、のぞき眼鏡式映写機キネトスコープを発明、これは箱の中を覗き込んで見るもので、大勢が見られるものではなかった。そして1897(明治30)年、改良映写機ヴァイタスコープを発明し、撮影、フィルム、映写機や周辺機器の特許を独占した。この中で35mmフィルムのスプロケットの規格が現在まで使用されている。なお、1903年(明治36)年、初の西部劇映画「大列車強盗」を制作している。

(2) トースター、アイロン、ミシン、ポット、電動ミシンなどの家電製品

1910(明治43)年頃から1930年頃にかけて多種類のトースター、そのほかアイロン、ポット、電動ミシンなどの家電製品を発明した。

(3) 鉱山の開発——1890(明治23)年、鉄鉱石の鉱山開発を始め、ベルトコンベアーなど鉱山機械などを発明したが、1899年(明治32)年にエジソン鉱山より低コストの鉱山が開発され、採算に乗らず閉鎖した。

(4) 蓄電池の発明——1889(明治22)年頃に、現在のアルカリ電池の原型となる蓄電池を発明し、その後も蓄電池の改良を進め、1910

年頃にアルカリバッテリーを積んだ電気自動車を制作した。1回の充電で160kmの走行を実現したが、高価なため約6,000台しか販売できなかった。

(5) セメント事業とエジソンの建築工法——

1901(明治34)年、51歳の時セメント事業を始めた。当時、アメリカでは建設ラッシュが続き、セメント製造ラインで生産した。そして需要を増やすため鉄の型枠にセメントを流し込んで鉄筋コンクリートの建物を造る建築工法で、多くの建築家たちに反対されたが次第に普及していった。

#### 5 晩年のエジソン

1914(大正3)年にウェスト・オレンジ研究者が焼失しまうが、すぐに再建し、この研究所で最後まで研究に没頭した。

(1) 合衆国海軍顧問委員会の会長に就任

戦争が嫌いなエジソンは軍事の発明はしてこなかったが、第1次世界大戦が始まると、1915(大正4)年、要請され合衆国海軍顧問委員会の会長に就任し、軍事技術の問題に没頭することになった。ここでの課題は潜水艦探知用聴取装置、潜水艦用水素検出器、水中探照灯、船の急速回転方など潜水艦の脅威に対するものであった。この委員会から生まれた無線用真空管は大戦後のラジオ普及に欠くことのできない発明であった。

(2) 最も偉大な生きているアメリカ人に推選

1922(大正11)年、75歳の時ニューヨーク・タイムズ紙の投票で最も偉大な生きているアメリカ人に選ばれた。

(3) 白熱電灯発明50周年記念祝賀会が世界各地で開催

発明王エジソンと自動車王ヘンリー・フォードの二人は強い友情に結ばれており、エジソンを「世界最大の科学者であり、世界最悪の起業家である」と評していた。

そして、かつてエジソンが使った列車の実験室やメロンパーク研究所を当時のまま忠実に再現、またエジソン発電機などを要した博物館を建設した。

50周年祝賀会を催したところ、日ごろ大勢の前で話すことのなかったエジソンが「ヘンリー・フォードに対する感謝の気持ちはとても言葉では言い尽くせない。しいて強い言葉でいうならば、最高にして、最大の、もっとも豊かな意味において、こう申し上げることが出来ます。『彼は私の友人』だと」挨拶した。

(4) フーバー大統領が述べた弔辞

1931(昭和6)年10月18日、84歳でウエスト・オレンジの自宅で死去した。葬儀には世界各地から多くの人が集まり、アメリカのフーバー大統領は「世界の人類は、今ここに眠る偉人の遺産を受け、長くその恵に浴する

ことだろう。」とのべた。

また、フーバー大統領の呼びかけでアメリカ国内では、この夜、エジソンの発明である電灯を1分間消灯してエジソンの冥福を祈った。  
なお、エジソンの簡単な略歴は次の通りである。

エジソンの略歴

西 暦	和 暦	履 歴 内 容
1847	弘化4	アメリカのオハイオ州ミランで生まれる
1855	安政2	小学校に入学するが、3か月で退学し母親に勉強を教わる
1857	安政4	科学に興味を持ち自宅の地下室に実験室を造る
1859	安政6	グランドトランク鉄道会社の鉄道売り子になる
1862	文久2	世界初の列車内新聞、週刊「グランド・トランク・ヘラルド」を発行
1865	元治元	ケンタッキー州ルイヴィルのAP通信支局の報道通信員として勤務
1868	明治元	ウエスタン・ユニオン社ボストン支局の電信技士として勤務
1869	明治2	ポーブ・エジソン商会を開設、電気式投票記録器を発明、製造工場を造る
1871	明治4	メアリー・ステイウエル(16歳)と結婚、タイプライター、印字電信機を発明
1872	明治5	二重通信機を発明
1874	明治7	四重通信機を発明
1875	明治8	謄写版を発明
1876	明治9	メロンパーク研究所を設立、電話の炭素送話器を発明、グラハム・ベルが電話を発明
1877	明治10	蓄音機(フォノグラフ)を発明
1878	明治11	エジソン電灯会社(Edison Electric Light Company)をニューヨークに設立、白熱電球の研究開発を開始 1889年に系列会社と合併しエジソン・ゼネラル・エレクトリック・カンパニーに改称
1879	明治12	炭素フィラメントの白熱電球を発明
1880	明治13	京都の真竹を使ったフィラメントの電球を開発
1882	明治15	ニューヨークのパールストリートにエジソン中央発電所を建設(出力:540kW)
1883	明治16	「エジソン効果」(真空中の整流効果)を発見
1884	明治17	メアリー・ステイウエル夫人が病気のため29才で亡くなる
1884	明治17	藤岡市助フィラデルフィア万国電気博覧会視察後ニューヨークでエジソンに会う
1886	明治19	マイナー・ミラー(19才)と再婚
1886	明治19	岩垂邦彦、渡米しエジソン・マシンワークスに入社
1887	明治20	丹羽精五郎、正道、渡米しエジソンに会い発電機、白熱灯の教えを受ける
1887	明治20	ウエスト・オレンジ研究所を設立
1889	明治22	活動写真を発明、パリ万国博覧会に行き歓迎される
1891	明治24	映画の撮影機・映写機を発明(キネトスコープの特許を申請)、鉄鋼会社を経営
1892	明治25	トムソン・ヒューストン・カンパニーと合併、GE社(ゼネラル・エレクトリック・カンパニー)を設立
1898	明治31	セメント事業を経営
1900	明治33	エジソン電池と呼ばれるニッケルアイアン・アルカリ蓄電池を発明
1901	明治34	ニュージャージー州にセメント工場を建設
1903	明治36	初の西部劇映画「大列車強盗」を制作
1909	明治42	アルカリ電池の改良に成功し、A型蓄電池と命名
1910	明治43	新型アルカリ電池を搭載した電気自動車を実用化
1913	大正2	活動写真と蓄音器を組み合わせた「キネトフォン」の公開実験
1914	大正3	炭鉱夫が使用する電気安全灯の特許を取得(67才)
1915	大正4	米海軍顧問会議会長に就任
1926	昭和元	トーマス・A・エジソン社の社長を退任、経営権を息子チャールズに移譲
1928	昭和3	アメリカ合衆国勲章を授与される
1929	昭和4	白熱電球50周年を記念して実用化第1号を再現するデモンストレーションを開催
1931	昭和6	病没、10月21日の葬儀の夜、功績を称えてアメリカ中の電気が1分間消される

## エジソンと日本の関係

エジソンの生きた時代は、日本が大変革期・明治維新を迎えた時代であった。特に日本の黎明期日本の電気事業者はエジソンの研究室を訪れ、発明した製品に驚き、その開発技術を教わった。そしてエジソンは訪れた技術者に「外国から輸入すればいいと考えてはいけない。自分の国でも作ろうという気概がなければその国は滅ぶ」と語り、鼓舞したといわれる。

エジソンは一度も日本を訪れることはなかったが、日本の文化や風習に対して深い理解を示していた。ここではエジソンと交流を持った日本人を簡単に紹介する。

### 1 日本の電気事業の基礎を築いた電気学者

(1) 藤岡市助 1857(安政4)年~1918(大正7)年  
藤岡市助は「日本のエジソン」「電力の父」と評され、1884(明治17)年にフィラデルフィアで開催された万国博覧会を視察した後、ニューヨークのエジソン電灯会社を訪問した。そこで白熱電灯をはじめ多くの機器を見て感動し、エジソンに白熱電球と電話機を日本の技術者に紹介したいので送ってくれるよう依頼した。

そして1887(明治20)年に東京電灯株式が創業、1890(明治23)年に「白熱舎」を設立し白熱電球の生産を始めた。なお、詳細については日本電気協会中部支部で連載中の「中部のエネルギーを築いた人々」平成29年7月号「わが国電気事業の創設者で日本電気協会を設立した藤岡市助」を参照されたい。

(2) 岩垂邦彦 1857(安政4)年~1941(昭和16)年  
岩垂邦彦は1882(明治15)年に工部大学校通信科を卒業し工部省の電気技師となった。1886(明治19)年に官を辞し横浜のフレージャー商会の紹介状を手にニューヨークにわたりエジソン工場の「テストイング・ルーム」で働きアメリカ式の経営と技術を学んだ。1888(明治21)年に大阪電灯株式の技師長となり同社で初の西道頓発電所の建設にあたった。この発電所はアメリカのトムソン・ヒューストン・エレクトリック社から交流発電機を導入し、1,100vの高圧送電方式を採用した。

その後、1899(明治32)年に日本初の外国

資本との合併会社日本電気合資会社を設立、専務取締役役に就任した。なお、詳細については日本電気協会中部支部で連載中の「中部のエネルギーを築いた人々」平成29年12月号「エジソンに学び日本に交流発電方式を推進した岩垂邦彦」を参照されたい。

(3) 丹羽精五郎 1845(弘化2)年~1937(昭和12)年  
丹羽正道 1863(文久3)年~1928(昭和3)年  
名古屋電灯株式を設立し、発電所を建設するにあたり、丹羽精五郎、正道は、当時ハドソン河畔に住んでいたエジソンを訪問した。

名古屋電灯誌を見ると

① 名古屋電灯のエジソン式直流発電機は、エジソン自身がドイッチェ・エジソン・ゲゼルシャフトを紹介し低廉に購入したこと。

② エジソンと一緒に馬車で市中に出かけ馬車道に馬糞が落ちていたりすると、そのまま放棄するのはもったいない。加工化成して再び馬糧にすることは出来なかなど冗談を言い、また、研究室を案内してもらおうと、そこには白熱電球フィラメント材料として日本和紙などが収蔵されていたこと。

③ 日本への来遊を勧誘すると、軽気球が改良されて、米国から直線に行けるようになれば喜んで訪日したいこと。

このように大変な歓迎振りとの両者の会話の中にもエジソンの発明の考え方の一貫を知ることができる。

名古屋電灯誌によると「名古屋電灯創業の頃、発電機中最も優良のものはエジソン式にして、東洋における販売権は、横浜セール・フレージャー商会の握る処なりしたため、東京電灯会社はもとより言うまでもなく、宮内省にしてもみな同商会を経由して同発電機購入の契約をしたが、その日本渡し価格と米国市場における価格との間に著しき懸隔あり、フレージャー商会が暴利を貪ぶる如き形跡明らかなりしをもって、本社より機械器具等購入のため海外に派遣せられたる丹羽正道および丹羽精五郎の両氏は、ニューヨークにおいて親しくフレージャー氏と会い、価格の引き下げに関して種々交渉するも容易に成せず、その間において、フレージャー氏の紹介により、当時

ニュー・ジャージー州オーレンジー市のハドソン河畔に在住中なりしトーマス・エジソン氏に面接せしが、氏は両氏を待つこと頗る慇懃にして、午餐会を開いてこれに招待し、或は馬車を共にして市中を駆けり、其の他研究室、食事などにも案内し、胸襟を開いて語るころありしかば、丹羽正道氏はエジソン氏に告ぐるに、発電機はエジソン式をもって最良とするがゆえにこれを購入せんとするに意あるも、価格の点においてフレザー氏と折合わざるものあるを告げしに、氏は両丹羽氏とフレザー氏との間にたつて調停の労を取る所ありしが、フレザー氏はエジソン氏の調停を拒絶せしため、氏もやむなく爾に丹羽氏を独逸伯林のドイッチェ・エジソン・ゲゼルシャフトに紹介し、フレザー商会を経由せずして、米国における同一のエジソン式発電機を同会社より低廉に購入し得らるる便を供せり。

エジソン氏は当時すでに多数の学者をその研究所に招聘し、各種の方面にわたる研究に従事せしめつつありしが、倉庫内には白熱電灯の繊維原料に対する試験材料として、各種の日本紙を貯蔵し、中には、両丹羽氏の未だ嘗て一見せざりし種類をすら存し、両氏を驚かさず處少なからざりき。エジソン氏は両丹羽氏との交話中好んで諧謔を弄せしが、或は路上に馬糞の散乱するを見ては「これをこのまま放棄する如きは天物を暴殄するの著しきものゆえ、加工化なして再び馬糞たらしめ得る方のあるべき筈成らずや」など語り、また丹羽精五郎氏が日本への来遊を進めるや「軽気球の改良により、米国より直線的に航行し得らるる時代到来せば、喜んで渡日すべし」と答ふる等、諧謔縦横の間にも発明思想を暗示するものありしには、両氏も感嘆の情を禁じ得ざりしといふ。」と記載されている。

なお、詳細については日本電気協会中部支部で連載中の「中部のエネルギーを築いた人々」平成30年2月号「名古屋電灯創設を成功に導いた功労者、丹羽精五郎」を参照されたい。

## 2 エジソンの元で学んだ日本人

(1) 岡部芳郎 1884(明治17)年~1945(昭和20)年  
エジソン唯一の日本人助手で、最も信頼された岡部芳郎は山口県立大島商船学校を卒業後、航海士としてニューヨークで体調を崩しそのまま下船した。1904から1914年までニュージャージー州のエジソン研究所で蓄音

機の改良に取組み、助手を勤めた。

帰国後エジソンのトーキー映画の撮影技師と松井須磨子の「カチューシャの唄」の映画版を制作した。しかし1945(昭和20)年の神戸大空襲で命を落としエジソンゆかりの品々も焼失した。

(2) 沢井廉 1865(慶応元年)年~1894(明治27)年  
1886(明治19)年に東京大学理科大学大学院に進学、翌年、梅浦精一、渋沢栄一らの電話会社設立の電話調査をするため、アメリカにわたり、エジソンの助手を勤め、蓄音器の発明に携わったといわれる。病弱で30才で亡くなった。

## 3 エジソンと日本人

エジソンと関わった日本人を時代順に紹介する。

(1) 金子堅太郎と伊沢修二の二人は、1876(明治9)年、ハーバード大学留学中に日本人で初めて電話機を使い、ベルを訪ねた後エジソンの元を訪ねている。

①金子堅太郎 1863(嘉永6)年~1942(昭和17)年  
1853(嘉永6)年に福岡県に生まれ、1871(明治4)年、岩倉使節団に同行した藩主・黒田長知の随行員となり、團琢磨とともにアメリカに留学、ハーバード大学で小村寿太郎と同宿し勉学に励んだ。また在学中にセオドア・ルーズベルトと面識を得た。これらのことで1905(明治38)年、ポーツマス会議において日露双方の意見が対立して交渉が暗礁に乗り上げた時、外相で小村寿太郎全権より依頼を受け、ルーズベルト大統領と会い講話条約の締結に貢献した。

②伊沢修二 1876(嘉永4)年~1917(大正6)年  
1851(嘉永4)年に長野県伊那市に生まれ、1867(慶応3)年に江戸に出てジョン万次郎から英語を学んだ。1875(明治8)年に師範学校教育調査のためアメリカに留学、マサチューセッツ州ブリッジウォーター師範学校、ハーバード大学などで視話術、音楽教育、聾啞教育などを研究した。また、グラハム・ベルから視話術を学んだ。

(2) 新渡戸稲造 1862(文久2)年~1933(昭和8)年  
盛岡市で生まれ、札幌農学校卒業、1883年に東京大学に入学した翌年、アメリカのホプキンス大学に留学した。1898(明治31)年にアメリカ、カリフォルニアで過労による病氣療養中に英文で「武士道(Bushido-the soul of Japan)」を執筆し出版された。この本は日

本人の精神を分かり易く説明したもので、エジソンの愛読書の一つであった。

(3) 渋沢栄一 1840(天保11)年～1931(昭和6)年

日本資本主義の父ともいわれる人で、1909(明治42)年、渡米実業団の団長となって、米国各地で政治・経済・社会福祉・教育など多方面の施設を見学し、第27代大統領ウィリアム・タフト、発明王トーマス・エジソン、鉄道王ジェームズ・ヒルなど各界実力者と面談した。その後も親しい交際を続け、1922(大正11)年、エジソンの75歳の誕生日に日本工業倶楽部で祝賀会を開催し、エジソンからの書簡が公開されている。

(4) 野口英世と星一の二人は、1922(大正11)年にエジソンを訪ね、エジソンからメッセージ入りの写真を贈呈されている。

①野口英世 1876(明治9)年～1928(昭和3)年  
1876年福島県猪苗代町に生まれ、1900年委渡米し1904ロックフェラー医学研究所の助手となる。1911年に梅毒スピロヘータの純粋培養に成功するなど世界的な細菌学の権威者である。

②星一 1894(明治27)年～1951(昭和26)年  
1873(明治6)年福島県いわき市に生まれ、1894(明治27)年に渡米、1901コロンビア大学を卒業し、1911(明治44)年に星製薬を設立し、キニーネの製造やモルヒネの国産化に成功するなど東洋の製薬王と呼ばれた。野口英世やフリッツ・ハーバーを日本へ招待するなどした。

(5) 御木本幸吉 1858(安政5)年～1954(昭和29)年  
世界の真珠翁・御木本幸吉は1926年フィラデルフィアで開催された独立150周年記念万博において、真珠で「五重塔」を展示、好評を博した。

その折にエジソンのウエスト・オレンジ研究所を訪れ、エジソンが「真珠の養殖は驚くべき発明だ」と絶賛した所「あなたは巨星のような存在だが、私は多くの発明家の一人にすぎない」と答えたという逸話が残されている。

### (参考) BANDAI MUSEUM

おもちゃのまちバンダイミュージアムは

「日本のおもちゃ」「西欧を中心としたアンティーク玩具」「エジソンの発明品」「ホビー(ガンダム)」の4つのテーマミュージアムで構成された玩具を主とした博物館である。

このうち、エジソンミュージアムは、アメリカの特許弁護士でエジソン研究家のヘンリー・幸田氏とアンドロウ・ラ氏が25年かけて収集したエジソンの発明品約2900点を2003(平成15)年に公益財団法人バンダイコレクション財団が譲受け、現役で作動する動態コレクションとして展示している。

なお、博物館の概要、アクセスなどの情報はバンダイミュージアム

- ① 所在地：栃木県下都賀郡壬生町おもちゃのまち3-6-20  
バンダイコレクションセンター内
  - ② TEL：0282-86-2310、  
FAX：0282-86-5076
- にお問い合わせください。



バンダイミュージアム



ガイドスペースコーナー

(寺澤 安正)